

会員だより

「生き物の死にざま」 を読んで

それは生き物の生きざまと死にざまの本なので。多くの生き物は、子孫を残すために生きていくように生かされているように生かされています。

生まれてから長い地中生活を経て、地上に出ると短い期間に子孫を残し死んでしまう蟬。



生き物の死にざま
稲垣栄洋著

オス同士で争い勝ったものがメスを得て交尾できる。強い子孫を残すためです。

多くの生物のオスは交尾が終わるとその生を終える。生物はそのようにプログラムされているのだという。

いろいろな昆虫、海洋生物、野生動物などの生まれてから死ぬまでの一生が書かれています。



ハサミムシ
イラスト

「ハサミムシ」のメスは春に産卵しその卵の上に覆いかぶさるようにして卵を守って、40日から80

日もの間その場所を離れず、もちろん飲まず食わず。そしてやっと卵が孵ると、小さな虫はその母親をエサとして食い尽くすのです。



カマキリが交尾中に
オスを食べている

また「カマキリ」は交尾が終わった後、オスを食い殺すといわれていますが、オスは交尾をしながらもメスに食われないうちで死んでいくそうです。

「ウミガメ」は溺死する。肺呼吸であるため数時間に1回は浮上して息継ぎが必要ですが網などにかかって浮上できないと溺死するのです。

「ハダカデバネズミ」は体に毛が無く赤裸で口を閉じていても歯が出てくるのでこの名があり、老化しないのだそうです。



単細胞生物は老化しないが、多細胞への進化の結果、テロメアという染色体が働いて老化

するようになった。生物はわざわざテロメアを進化させてきた。「老いて死ぬこと」は生物が獲得した時限装置だということです。

「シマウマ」の世界に老衰という言葉はない。ほとんどのものが大人になるまでに、肉食獣の餌食になってしまう。

この本には30種近くの生物の死にざまが出てきますが、生物がいかに子孫をよりよく残すために一生をささげてきたか。著者の生物と人間との違いというか、人から見た死生観がユーモアの中に深く考えさせられることが、多々あり、読後心に残る一冊でした。

記・写真 大岡津奈子

最近「アカモク（ギバサ）」

にはまっています

アカモクはギバサとも呼ばれていて、以前は漁に使う網に絡まったりして邪魔ものあつかいされていたそうです。

アカモクは海藻で、ひじき、昆布、わかめ等の仲間です。とても生命力が強く、昆布やわかめが育たない環境でも育つ逞しさを持っています。



地域ごとに呼び名が異なり、「ギバサ（秋田）」、「ギンバソウ（山形）」、「ナガモ（新潟）」などと呼ばれ、主に東北地方の日本海側の地域で古くから食されています。

近年、フコイダンやフコキサンチンなどの機能性成分が注目され、他にもカリウム・カルシウム・マグネシウム等の必須ミネラルや食物繊維を多く含むことから、美容・健康意識の高い女性を中心に注目を集めています。

近年では全国に出荷され、メジャーな存在になってきました。

茹でて刻むと強い粘りが出て、つるつるとした食感とクセの無い味、とっても食べやすい海藻なんです。茹でて刻んでパック詰めしてあるものや、それを冷凍したものもある。



毎日納豆を食べる時に一緒に混ぜて食べています。普通納豆に醤油が付いていますが少々味が濃いので以前は半分くらいしか使っていませんでしたが、ギバサを30g程度入れてかき混ぜれば丁度良い味！！

フコイダン（ネバネバ成分）、鉄分、ミネラルなど私達にとって大切な栄養素がいっぱい含まれています。ギバサにポン酢をかけて食べたり、みそ汁に入れたり、とろろ芋に入れて、もっとネバネバにして食べたり、美味しいです！

記・写真 大岡津奈子

空豆のように 空を見上げたい



記・写真 牧戸富美子

空豆の名のいわれはツヤツヤとした緑のさやを空に向けて立つ様という。今年の我が家の家庭菜園ではうまく育った。それも赤い空豆である。平地では実ってきたころに、油虫がつき、成長を止めてしまう。

記・写真 上村サト子

つけても最近の散歩は人とすれ違えば視線をそらせ距離を開けるのに違和感を感じる。空豆のように堂々と空を見上げ、堂々とすれ違う人の顔を見て、それなりの表現をしたいものだ。



赤い空豆



空豆は天に向かって実る